

加賀野菜

赤ずいき

栽培マニュアル



【赤ずいき】

科名 サトイモ科

代表産地 花園地区

特徴 サトイモの葉柄をずいき言い、サトイモの葉柄が赤く、葉柄を食用とする専用の品種を「赤ずいき」と呼んでいる。

品種特性

高温、多湿を好むが、日陰にも耐える。生育適温は、気温25〜30度、地温22〜27度である。気温が適温であっても地温が低いと生育が停滞するため、催芽やマルチ栽培によって初期生育の助長を図る必要がある。



栽培カレンダー

● : 伏せ込み ■ : 定植 ■ : 収穫

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作業			●	●	■	■		■	■	■		

1 伏せ込み

【伏せ込み時期】

- ・ 3月中旬に伏せ込みを行うと、催芽に30〜35日を要する。
- ・ 定植予定日から遡って、伏せ込み日を決定する。

【準備】

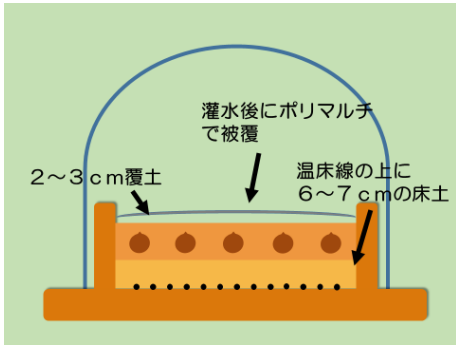
- ・ 伏せ込みは、催芽床に直接行うか、ポリポットに行く。
- ・ 催芽床に直接伏せ込む場合は、温床線の上に山砂を約6〜7cm敷き、十分散水して熱伝導が均一になるようにしておく。
- ・ ポリポットに行く場合は、3〜3.5寸の黒ポリポットを使用する。

【伏せ込み】

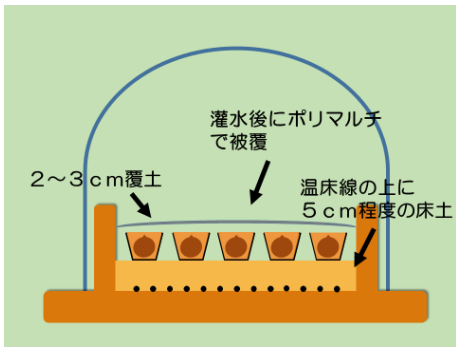
- ・ 催芽床、ポリポットのいずれの場合も、発芽部の上に揃え、山砂が2〜3cm被るように種芋を伏せ込む。

【温度管理】

- ・ 地温で日中は30度、夜間は20度を目標に保温する。発芽が揃うまで換気は行わず、気温の高い日はこもを掛けるなどで遮光を行う。
- ・ 発芽が揃ったらポリマルチを除去する。徐々に外気温に慣らしながら健全な苗に仕上げる。
- ・ 日中の気温で20〜25度を目安に管理し、灌水はやや控える。



直接伏せ込み



ポリポットへの伏せ込み

2 定植

【定植までの準備】

- ・ 定植の20日以上前までに堆肥の施用と深耕によって、作土を膨軟にする。

- ・ 定植2週間前までに基肥を全面施用し、耕起、畝立て後、マルチ被覆を行う。

- ・ 畝は幅1m35cm〜1m50cm、高さ20〜30cmとする。

【定植】

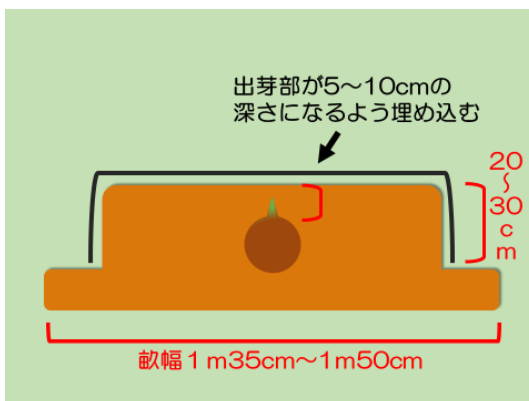
- ・ 株間は30cm〜50cmとする。

- ・ 定植は苗への負担を軽減するため、風が穏やかで温暖な日を選ぶ。
- ・ 畝の中央に移植ゴテで種芋よりもひと回り大きめの穴を掘る。
- ・ 出芽部が表土から5〜10cmの深さになるように埋め込む。

施肥設計 (例)

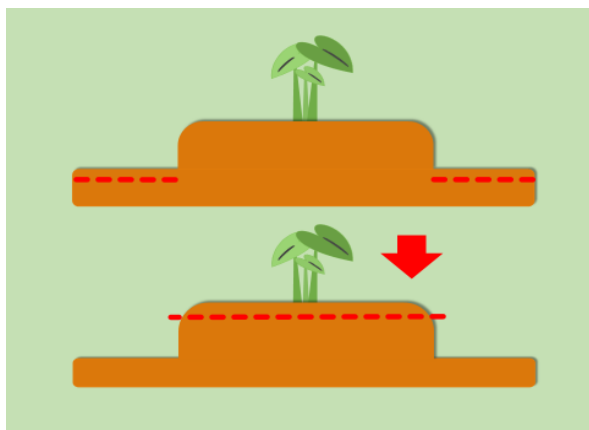
(kg/10a)

肥料名	基肥	追肥 (2回)	成分量
固形30号	100	40	N :19.6 P ₂ O ₅ :30.1 K ₂ O :19.6
苦土石灰	140		
BM重焼燐	30		
有機特A801		70	



(注) 深植えは出芽遅れ、浅植えは親芋肥大不足に繋がる

3 追肥 土寄せ



株元を中心に盛り上げる

灌水のポイント

- ・乾燥に弱いので、土壤水分が切れる前に、随時、畝間灌水を行う。
- ・生育中期からの灌水は、品質向上・収量増加の効果が高いため十分に行うが、過湿を避けるため、灌水後は排水を徹底する。
- ・高温期の日中の灌水は根腐れを起こしやすいので、朝夕の気温の低い時間帯に行う。

- ・種芋が表土から浅い位置にあると、光に当たることや、芋の肥大が制限されるなどが原因で生育が悪くなる。
- ・子芋、孫芋の肥大を促進するため適宜土寄せを行う。
- ・定植から30〜40日後、本葉3枚、草丈が20cm程度になった頃にポリマルチを除去（防草を目的に再度張り直しても良い）し、追肥、土寄せを行う。
- ・土寄せ時の断根は、生育の停滞や吸水力の低下を起す恐れがあるため、畝は極力削らずに通路の土を寄せる。
- ・予め畝の肩から通路にかけて追肥を散布し、肥料とともに株元に6cm程度の土を盛る。

4 収穫 調整

【収穫】

- ・収穫は7月中旬以降から開始し、茎葉が傷み始める9月下旬までに完了させる。
- ・株の周囲に数箇所スコップを差し込み、芋ごと掘り起こす。
- ・土を落とし、傷つけないよう運搬する。

【調整】

- ・収穫後、芋ごとに分割し、葉、根を切り落とす。
- ・速やかに日の当たらない場所へ運ぶ。調整作業まで時間を置く場合は、地下部を水につけ、立てて保管する。
- ・土や汚れを洗い落としながら、傷、虫害のあるものを取り除き、等階級ごとに仕分けする。
- ・箱の潰れを防ぐため、表面が乾いてから箱詰めする。



はさみや包丁で根を切る



土、汚れの洗浄



表面が乾いてから箱詰め

5 種芋の保存

【母本選抜】

- ・収穫時に生育の良い株を、翌年の種芋採取用として圃場に残す。
- ・1株から10〜20個の種芋が採取できることを考慮し、母本の株数を決定する。
- ・10月下旬頃、葉柄が枯れ、倒れ始めたころから霜が降りる前までに種芋を掘り上げる。
- ・種芋を傷つけないよう、株を中心に直径60cm程度にスコップや鍬を入れ、株ごと掘り上げる。

【保存】

- ・土を洗い流し、日陰で表面を乾燥させてから保存する。ばらして保存する場合は、丁寧に芋をはずし、腐敗防止のため断面に殺菌剤などを塗布する。
- ・腐敗を防ぐために、籾殻やおがくずの中に埋め、冬期でも気温が10度を下回らない、室（むろ）や室内で保存する。



掘り上げ前の状態



地上部を刈り取っておくと掘り上げやすい

6 圃場の管理

- ・同じ圃場で栽培を続けると、連作障害が発生するリスクが高まるため、4〜5年での輪作、適量の施肥管理、有機物の投入、客土や深耕等を行う。
- ・栽培を重ねると、徐々に下層の土壌が固まり、排水性が低下する。10年に1度は、栽培終了後に、重機で深さ1m以上の天返しを行う。下層の清潔な土壌を表土にし下層土が軟らかくなることで、排水性が改善される。

7 病害虫防除

- ・日常の収穫や管理と併せ、生育状況等を観察し、病害虫の早期発見と初期防除に努める。
- ・特に葉を吸汁するアブラムシ類やハダニ類、葉を食害するハスモンヨトウ等の鱗翅目類の発生に注意する。
- ・病害虫は、年によって程度に差はあるが、繰り返して発生するので、発生時期や防除実績を日誌等に記録し、翌年以降の防除に活かす。
- ・農薬は「野菜類」または「サトイモ（葉柄）」の登録のあるものを使用する。

・農薬の使用にあたっては、最新情報入手するとともに、ラベルの記載内容を必ず確認して使用する。

・農薬の最新情報は、農林水産省「農薬コーナー」を参照。

URL: <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

連作障害

- ・特定の肥料成分が多かったり、不足した状態が続くと、微量元素の過剰症や欠乏症が発生する。
- ・特定の細菌やウイルスなどが土壤中に増加したり、特定の土壌害虫が生息地として定着することで、次第に生育不良になっていく。

加賀野菜「赤ずいき」栽培マニュアル
発行 令和2年3月
発行元 金沢市
監修 金沢市農協赤ずいき部会
編集 金沢市農業センター
金沢市下安原町東1471
電話 (076)249-2744
FAX (076)249-4470

